

彼女との熱い夜【フェラ編】

社会人の俺と、現役モデルの彼女・ミナ。一見クールで感情を表に出さない彼女だけど、二人きりになると、俺にだけ見せる顔がある。

この日、いつもより短いスカートで現れたミナは、玄関の前で少しだけ頬を赤らめて、こう言った。

「……今日は、そういうつもりだったから」

恥じらいと欲望が交錯する、いつもとは違う夜。理性が溶けて、甘く、激しく、求め合うひとときが始まる。

玄関のドアを閉めた瞬間、彼女がくると振り返る。今日は普段よりも丈の短いミニスカート。その細くて長い脚が、やけに目を引いた。

「……ねえ、気づいた？ 今日のスカート、ちょっと短めなんだよ」

そう言って彼女——ミナは一步、俺に近づいてくる。わざとらしく胸元を反らせて、ふわりとFカップの膨らみが俺の胸に押し付けられる。

「だって……今日は、そういうつもりだったから」

クールな声は普段通りなのに、潤んだ瞳とほんのり赤い頬だけが、彼女の高まった本音を物語っていた。

そっと、俺のシャツを掴んで顔を近づけてくる。

「……キス、して」

その一言に、俺は迷わずミナを抱き寄せ、唇を重ねた。最初は軽く触れるだけだったけど、ミナはすぐに舌を絡めてくる。深くて、甘くて、どこか切羽詰まったキス——。

「ん……ふっ……もっと、して……」

胸を押し付けながら、ミナの手が背中を這ってくる。呼吸は浅くなって、キスの合間に漏れる声には、確かな熱が滲んでいた。

「触って……ねえ……もう我慢できないから……」

部屋に入ってまだ数分。けど、玄関先だというのに体温はすでに臨界点——甘く、熱く、始まりの気配が満ちていた。

キスの合間にミナの手を取り、俺はリビングを抜けて寝室へと導いた。部屋の扉を閉めると同時に、ミナがまた俺の胸に抱きついてくる。

「……ベッド、行こ……？ もっと触れて欲しいの」

その囁きに応えるように、俺はミナの腰をそっと引き寄せて、ベッドに押し倒した。ふわっと弾むシーツの上で、ミナは目を細めて俺を見上げる。

「ん……待ってた……ずっと、こうされるの……」

再び唇を重ねると、ミナはすぐに舌を絡めてきた。さっきよりもずっと深く、貪るように俺を求めてくる。舌を絡め合い、唇を吸い合うたび、ミナの身体が小さく震えるのがわかった。

キスを交わしながら、俺の手はミナの身体をゆっくりとなぞっていく。細いウエストを撫で、柔らかな膨らみへと指を這わせる。

「ふっ……そこ……だめ、ちょっと……っ」

ブラ越しに F カップのふくらみを包み込むと、ミナの声が甘く揺れる。恥ずかしさを隠すように目を伏せながらも、身体は正直に反応していた。

「……もっと、触って……」

俺の手がブラの上からやさしく揉みしだくと、ミナの背中がベッドの上で小さく反る。張りのある胸が、掌の中で弾むたびに熱を帯びていく。

「ねえ……外して。直接、感じたいの……」

その願いに応え、ブラのホックを外すと、ゆっくりと布をずらす。露わになった肌は、滑らかで色っぽくて、息をのむほど美しかった。

「……見ないでよ、恥ずかしい……」

そう言いながらも、ミナの表情はどこか嬉しそうで。目を伏せつつも、視線だけは俺から逃げていなかった。

俺はそのまま胸に顔を寄せ、舌をゆっくりと這わせていく。

「んっ……あ……」

乳首に触れた瞬間、ミナの腰がわずかに跳ねた。

その反応が愛おしくて、舌先で何度もなぞるように刺激を与える。柔らかく尖った感触を唇で挟み、時に吸い、時に転がすように。

刺激に呼応するようにミナの吐息が熱を運び、全身の力が少しずつ抜けていくのが分かる。

「やっ……そんなにしたら……おかしくなっちゃう……」

そんな言葉とは裏腹に、ミナの腕は俺の頭をぎゅっと抱き寄せていた。

時折、俺の髪に爪を立てるような仕草を見せながらも、その手は離そうとはしない。

やがて俺が顔を上げると、ミナの頬は上気し、瞳は潤みきっていた。

ベッドに腰を下ろすと、ミナもすぐ隣に座ってきて、俺の肩にぴったりと身を寄せる。

さっきまでのキスや愛撫の余韻を引きずっているのか、目が合うたびにじっと見つめてくるミナ。

そして、囁くような声で呟いた。

「……もう、さっきからずっと……触りたくて我慢してたの」

そう言いながら、ミナの指先がそっと俺の太ももに触れる
すぐに手のひら全体で包み込むように撫で、ゆっくりと内
ももへ——

じわじわと熱がこもる場所へと、確かな意志をもって進ん
でいった。

「……いい？ もう、我慢できないの……」

囁くような声と、熱のこもった視線。それだけで心臓がドクン
と跳ねる。答えるより先に、ミナの手は俺のベルトにかかって
いた。器用に外し、ジッパーを下ろすと、ミナは膝立ちになる
ように位置を変える。

「……見せて。ちゃんと、全部……」

スカートの裾が自然と上がって、引き締まった太ももが覗く。
ミナの顔がぐっと近づいて、下着越しに膨らみにそっと頬を寄
せた。

「……ん……もう、こんなになってる……」

熱を帯びた声が耳元に落ちる。ゆっくりと下着をずらして、竿
を露わにした瞬間——ミナの瞳に宿る熱が、さらに濃くなるの
が分かった。

「……じっくり、見たいの。触っていい？」